



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

図書と私

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学図書館 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 洋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/87736

目次

図書と私	1	“グローバル”ってなんだろう?	6
岐阜大学の古典籍(6)		お知らせ	7
一本の袋が教えてくれること	4		
寄贈図書一覧(2021年7月～12月)	5		

～図書と私～



西尾 洋

図書館報への寄稿依頼を受け、自分と図書との関わりを書き出してみた。時期や場所によっても様々な思い出を、5つの切り口で振り返ろうと思う。

■図書館

小学生の頃に足を運んだのは、近所の公民館に備えられた簡易な図書室、自転車で20分くらいのところにある地域の市立図書館、そして3階建てのスーパーマーケットの一角に設置された子供向けの図書室（これは、しばらくのちに閉室してしまった）

だった。自然科学の図鑑シリーズや、野球におけるボールの投げ方などを解説した本を好んで読んだ。

中学生になると市立図書館で音楽のCDをたくさん借りるようになった。1人あたり5枚まで借りられた。我が家は6人家族だったので全員のカードを集め、最大30枚借りた。開架で空のケースを選び、カウンターにもっていくと司書さんが奥から中身の入ったケースをもってきてくれる。30枚もあるので、私の後ろに並んだ他の利用者に申し訳ない気持ちで司書さんを待った。（この原稿を確認した図

書館職員には「図書は自分のカードで借りてくださいね」と苦笑された。）

高校は大学の附属であったが、当時高校生は大学の図書館が使えなかった。どうしても読みたい本があるときは、高校の事務室の方に頼んでこっそりと借りてきてもらったりもした。よく覚えているのはフランスの作曲家が自らの作曲技法について解説した本を訳したもので、書店には売っていない絶版本だった。まさに貪るように読んだのを覚えている。

その大学に進んで自由に図書館が使えるようになった。上野公園の隣、上野動物園の裏という立地条件からか、夏場は藪蚊がよく出た。図書館のカウンターでは蚊取り線香貸し出しというのがあり、利用カードと引き換えに蚊取り線香とそれを燃やす皿を借りた。しばらくして冷房が完備するとそのサービスはなくなった。

やがてドイツの大学に留学した。大学は、ヨーロッパの古い都市によくある、文字通り隣り合って建つ商人屋敷をまとめて取得し、中の壁を抜いてつながれた建物で、足を踏み入れるとまるで迷路だった。そんな建物の屋根裏にあたるのが図書館だった。太い梁に頭がぶつかりそうになりながら書棚を巡った。貸し出しの冊数は無制限、半期が終わるまで借りられた。

このように振り返ると、その時その時で借りた本の中身だけではなく、手触り、デザイン、また図書館の建物風景、書棚の位置、司書さんの顔などが付随して思い出される。

■実物は厄介だからいい

クラシック音楽の作曲を一応の専門ということにしているので、主に音楽関係の書物（楽譜、事典、専門書）とCDが多い。留学から帰るとき、現地で蒐集した書物がある程度の量だったので、馴染みだった地元のワイン屋さんの伝手で業者を紹介してもらい、ハンブルクから出る貨物船のコンテナ一角を確保してもらった。大井埠頭に船が着くころに日本

の海運会社から連絡があり、トラックを借りて荷物を引き取り、税関に運んで検査を受け、家に運んだ。1トンはあったと思う。

最近はこの資料群がさらに膨大化することへの不安が徐々に増してきたのと、音楽がインターネットで簡単に聴けるようになってきたことから、物品を新たに買う速度が緩やかになった。しかし、インターネットで手軽に聴く音楽には解説書もなければジャケット写真もなく、買いに行った店の驚くべき知識を備えた玄人店員たちも、商品紹介のマニアックな文章も、そして高い買い物をして興奮しながら帰ってきたあの体験も、ついていない。

インターネットで、ワンクリックで聴くことのできる音楽は、なかなか私の記憶に定着しない。簡単に、すぐに手に入るものは、すぐに記憶から去ってしまうのだろうか、あるいは単に私が年を重ねたから記憶をするのが苦手になっただけなのか。

時間ということでは、注文した本がなかなか届かないというのはドイツではよくあることだった。去年、私が7年ほど前に注文したらいい本がようやくドイツから送られてきた。これが私の最長記録（その次が3年越しのもの）。中には10年待っているという先生もいるし、もっと時間がかかっている本もきっとあるに違いない。出版社としては発刊予定が立って客から注文を受けるのだが、おそらく著者のせいで肝心の出版になかなか漕ぎつけられず、じりじりと時間が過ぎていったのだろう。狭い専門業界で、なおかつ専門書しか出さない出版社だから、読者もみな気長に待っている。特段急いで読むような本でもなく、困るほどのことでもないが、できれば生きているうちに送ってきてほしい。

■絵本

新刊の書店に行くとたいい絵本売り場を覗く。絵本はれっきとした大人の読み物で、この年になっても心が躍る。文字だけの本と根本的に違うのは、ページ構成が内容と連動しているところである。作

曲家としては、一定の時間をどのように構成するかということに常に興味がある。どのように始まり、どこでどう転換し、どのように終わるのか。それが作品の形であり内容でもある。絵本はたいてい16または32ページで作られていて、そのどこにクライマックスがやってくるのかの工夫がある。また、ページを繰るといふ作業が物語の展開と連動しているのもおもしろい。製本された紙芝居のようでもある。構成で最も驚いたのは『くまとやまねこ』という絵本。その始まり方が衝撃的で忘れられない。こんな絵本の始まり方、あっていいのだろうか。誰がこれを思いつくだろうか。

■楽譜

近年はインターネットで作曲家の自筆譜が公開されていたり、著作権や版権の切れたものが自由に使えるようになっていたり、タブレット端末を使って練習したり本番に臨む音楽家もいる。紙媒体を手にするのは減ってきたものの、やはり私は紙派である。タブレットやパソコンが寿命や事故で壊れたら、ファイルをインターネット上で公開しなくなったら、電子ファイルは開けないし、もう手に入らない。紙が最も長く確実に残る。紙は燃える危険があるが、パソコンやハードディスクも燃えるときは燃える。

楽譜は、今でこそ楽譜作成ソフトがあり、誰でもかなり高度な水準で楽譜が作れるようになったが、十数年前までは職人が銅板やハンコで一つ一つ手作業で作っていた。私はパソコンによる楽譜制作（浄書という）の仕事をしていたことがあり、今でも出版に関与していると思うことがある。それは、パソコンでどれだけ工夫しても、かつての手作業の楽譜の方が見た目は圧倒的に美しいということである。音符のレイアウト、線の太さ、1ページあたりの小節数の割合、全体のバランスは、古いもののほうが断然良い。出版社ごと、国ごとの風合いの違いもあって、見ているだけでも楽しい。良いレイアウトの楽

譜は、見ただけで音楽が浮き立ってきて、自然と体の中に入る。しかし時代の趨勢で職人芸を受け継ぐ人はいなくなり、今はほとんど途絶えている。

■本を読む時期、読まない時期

私の場合、本を集中的に読む時期とほとんど読まなくなる時期が数か月単位で交代する。読む時期は、以前買っておいてまだ読んでないものを紐解き、読まない時期には今後読みそうなものを買う。この周期が何と連動しているのかはよくわからない。

図書館に出向くのも周期があって、出向き始めると立て続けだし、読みたいものを一通り読むと休眠期間に入る。教育学部のはずれ、保育園の隣に立つ音楽棟が私の勤務先で、そこから大学図書館までは学内感覚では遠い。とはいえ車社会の岐阜では歩くこともほとんどなく、この程度の距離が遠出と感じるようになったのだと改めて思う。散歩気分音楽棟を出て、図書館のまわりのメタセコイアやヌマスギを見るのが楽しい。図書館に通わなかった時期を経て久々に足を運ぶと、青々としていたこれらの木々が落葉していて季節の移り変わりを知る。

図書との関わりは人それぞれだろう。時期や場所が変われば、関わる深さも密度も変わっていく。一度、自分と図書との繋がりを思い返してみるのも良いのではないか。

(にしお よう : 教育学部 音楽教育講座 准教授)

